

## 方言表記と漢字の六書

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学言語学研究会 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 史雄, 包, 聯群 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/0002000504">https://doi.org/10.14945/0002000504</a>

# 方言表記と漢字の六書

井上史雄・包聯群

キーワード：六書、会意、仮借、ふりがな、方言景観

## 1 漢字と方言の地域差

方言と漢字は、結びつきにくい。近代社会では、各地の方言の上に標準語（共通語、普通話）が覆いかぶさって、場面・文体によって使い分けられるようになった。方言の多様性は当然と受け止められる一方、標準語には地域差がないと、思われている。実際には地方共通語、地域共通語と言われるものが存在する（柴田1958）。方言は話しことばだが、標準語は文字ことばと強く結びつき、日本語では漢字とも結びつく。書きことばに使われる漢字もまた、地域差がないと、思われているが、現実には「方言漢字」を含め、様々な違いがある（笹原2013）。

方言は聴覚情報によるもので、文字（漢字、仮名など）は視覚情報に依存するため、相互の結びつきが薄い。また社会的に、方言は私的で軽視される傾向にあったのに対し、漢字は公的で尊重される傾向にあった<sup>1</sup>。しかし（orそれゆえに）日本の方言には、様々な漢語起源の語彙が見られる。それらは語源、原語が忘れられても、表音文字のかな・カナで表記できる。

ところが、中国のように表語（意）文字を国家の主要文字としている国では、少数言語・方言の表記に特別の苦労がある（包2015、2023）。人民元の紙幣には「中国人民銀行」という意味が、【表面】漢字；【裏面】alphabet（ピンイン）、モンゴル文字、チベット文字、ウイグル文字、チワン文字で記されているが<sup>2</sup>、

<sup>1</sup> 漢字の知識は、知能や人格を反映するかにとらえられる傾向がある。また字の書いてある紙を足で踏むことをたしなめる習慣もあった。

<sup>2</sup> 日本の紙幣では漢字とアルファベット（英語）が使われ、かなは表れない。貨幣では漢字のみが使われるのは、国外でコインが通用しないからである。

全国の公文書で使われる文字は、今漢字のみである。漢字は長い歴史を通じて、周辺の諸言語、諸方言を記録してきた。これを文字論の観点から位置づけてみよう。中国の漢字の地域差の概要は、笹原（2013）の第1章に述べられている。

## 2 漢字の形音義と記号論

漢字の歴史を振り返る。漢字は「形音義」から成ると言われるが、そのうち、**形**＝字形は、書けば示せる。活字などで示せないときは「土偏に川」など<sup>3</sup>と、漢字（またその一部）の構成で説明できる。字形の要素の組み合わせを変えて新字を作ることにより、字数を増やせる。

**音**＝発音を示すのは、表意文字では工夫が必要である。同じ発音の語を挙げればいいが、その語が読めないこともある。発音を前後2部分に分けて示せば、よく知られた漢字の組み合わせによって示せる。これが声母・韻母を組み合わせる**反切**で<sup>4</sup>、かつての日本の漢学や漢字辞典でも使用されたが、近代では使われない<sup>5</sup>。日本では表音文字のフリガナを利用する。中国でも表音文字のローマ字 alphabet を拼音ピンイン pinyin の形で使うことにより、発音の表示が便利になった。

**義**＝意味の説明では、同義語・類義語、(方言特有語の場合は)パラフレーズが使われる。この場合は発音を別の手段で示す必要がある。

### ソシュールの言語記号（単語）

近代言語学の開祖ソシュールは、言語記号（単語）を図2-1のように示した。上の絵が意味＝所記・シニフィエ *signifié*、下の文字が音＝能記・シニフィアン *signifiant* である。意味と音が連合連想関係にあれば単語となる。



図2-1 ソシュールの言語記号

形音義との関係を見ると、「義」（シニフィエ *signifié* = *signified*）と、「音」（シ

<sup>3</sup> 中国の深圳（しんせん）市の「圳 *zhèn*」字を指す。2024年1月14日付けの読売新聞（Microsoft Startの「読売新聞によるストーリー」）では、台湾の選挙に関する報道で、「呉●燮（ウージャオシエ）（●は「金」偏に「利」の右側）」という説明を使用している。即ち、漢字の「釗（簡体字の钊 *zhāo*）」字を指す。

<sup>4</sup> 「東」の音を「徳紅切」と示す類。

<sup>5</sup> 漢和辞典では、音訓索引がよく利用される。

ニフィアン signifiant = signifier) のみを見ている。視覚としての「形」は扱わず、つまり聴覚だけを考えている(包2023、包・井上2023)。文献学 philology からの独立を図ろうとした言語学の、独立宣言とも言える。

漢字は、視覚も連合・連想関係にあり、**図2-1**の上(または右)に「木」という漢字が連合関係を形成する。日本の漢字においては、文字と複数の音読み・訓読みが連合し、「木」でも「き、ぼく、もく」の読みが連想されるので、表語文字ではなく、表意文字と呼ぶほうがふさわしい。

漢字圏の人が、手・指を動かして字を思い出す現象「空書」を取り上げると、漢字は触覚情報(運動感覚)とも連合連想関係を作ると言える(五感のうちの残りの味覚・嗅覚は、ふつうは結びつかない)(包・井上2023)。

### 3 六書と外国語・方言

#### (0) 六書の3種類(単体文字 複体文字 用字法)

以下、**六書**(りくしょ)と関連づけて考察しよう(阿辻1988)。漢字の用法6種、六書は、3種類に分けられる。そもそも漢字の初期成立段階の**単体文字**、(1)象形・(2)指事と、既存の漢字を組み合わせた**複体文字**、(3)会意・(4)形声と、応用段階の**用字法**、(5)転注・(6)仮借かしゃである<sup>6</sup>。このうち最初の4種類は、漢字の成立に関わるもので、漢和辞典に記されることがある。(5)転注・(6)仮借は、4種類の漢字の文脈における用法なので、辞典には記せない<sup>7</sup>。「四体二用」<sup>8</sup>と言われる(河野・西田1995)。

漢字の「形音義」と結びつけると、(1)象形は文字どおり「形」を表す。(2)指事は「義」を手がかりに文字を作ったといえる<sup>9</sup>。(3)会意は「義」を利用し、(4)形声は「音」を利用して複体の新字を作った。(5)転注は「義」(意味)が変わる用字法で、(6)仮借は意味を無視して「音」(発音)を利用する用字法である<sup>10</sup>。

<sup>6</sup> 文字の分節性については、言及が少ない。しかし複体文字が単体文字からなる点は分節的だし、漢字の個々の要素も「永字八法」や「とめ、はね」などの下位の分節を含む。

<sup>7</sup> 河野六郎により、「楽」は転注の例とされる。しかし後述(3節(4)形声)の『大漢語林』には、「楽」の「ガク yue; 音楽」と「ラク le; たのしい」に関して、転注との言及がない。

<sup>8</sup> 四つの造字法と二つの運用法。

<sup>9</sup> 「音」を手がかりに新文字を作るのは、聴覚と視覚に連想関係を作ることであり、困難である。オノマトペ活用の可能性はあるが、実際には既存の漢字の音を利用し、(4)形声か(6)仮借を用いる。

<sup>10</sup> 六書の構想は許慎の『説文解字』以前からあり、その後も転注・仮借の解釈については議論が多い(阿辻1988)。

(7)「転形」として、「形音義」のうち「形」を変えるものを、7番目に加えることが考えられる。六書に入っていないが、本稿では文字論の理論的枠組みから見て、実態を整理しやすい枠組みを考え、第4節で述べる。漢字は時代により、甲骨文・篆書・隸書・楷書などと、グループとして形(書き方)を変えたが、個々の文字の変形もあった。文字の経済に従って、略字が普及するのが典型で、戦後日本の当用漢字、中国の簡体字(簡化字)制定<sup>11</sup>のように、大がかりな略字採用による転形もあった。「発」と「髪」が同じ字になるなどの極端な変形も行われた。前後の文脈があるので、混乱は起こらないという<sup>12</sup>。「転形」はときに方言・地域差と関わる。

これらのうち、文字の応用段階にあたる(6) **仮借**は、他言語や方言の発音を写せるので、本稿のテーマからいうと重要である<sup>13</sup>。以下、順に述べて、3節の最後に位置づける。

漢字の歴史と地域差(方言差)については、『方言漢字』(笹原2013)に詳しい。漢字成立以来の地域差の発生(と統一)について、要領よくまとめてあり、(多数の)会意と(少数の)形声により、日本の方言漢字が生じたことを述べている。

## (1) 象形と **emoticon pictogram**

漢字の起源は象形文字である。学校教育では「川木魚馬」などが初期に導入される。「形」を作るために、「義」を利用した。視覚的に表現できるものが象形である。困難なものは心理的イメージを利用したが、次項の指事で述べる。ともに単体文字である。

現在では新しい漢字を作る試みは少ない。中国ではかつて100を越す元素に漢字を作ったことがあったが、普及しなかった。26個のアルファベットによる

---

<sup>11</sup> 中国で20世紀70年代末から80年代半ばまでに行われた漢字の「簡体」化を撤廃した。例えば、「展」字は「尸」字の中に「一」とし、「病」字の「丙」が取られ、やまいだれ「疒」だけで示されるように簡略化されるなどのことがあった。

<sup>12</sup> 「まだれの中にカタカナのマ」を書く略字は、多摩地区で「摩」のために、漫画や同人誌で「魔」のために、使われるが、使用者や文脈が重ならない(笹原2007)。多摩地区では「摩」、三鷹市では「鷹」が、魔だれだけに省略されることもあるが、私的な使用であり、文脈があるので、混乱は起こらない。

<sup>13</sup> 仮借は、文字論・文字史でも重要な位置を占める。日本語を漢字の仮借で徹底的に表す手法「万葉仮名」が発展して、かな・カナという表音文字が生まれた。同様にエジプト象形文字でも意味と関係なく発音を表す書き方(仮借)が発展し、表音文字のシナイ文字、フェニキア文字などを経てアルファベットが生まれた。

化学記号が便利だからである。ことば遊びとして新漢字（感字）が作られるが、今は情報機器に乗らないので、普及しない。一方20世紀末期に、絵文字・顔文字がパソコン通信などから広がり、メーカーごとに違っていたが、emoticonとして統一され、UNICODEにも採用された<sup>14</sup>。これらは、新たな象形文字と言ってよい。顔の感情表現などは微妙な違いがあり、離散的discrete、弁別的distinctiveでない点もあり、区別するための読み方は、使用者に知られていない<sup>15</sup>。この点は、交通標識<sup>16</sup>やトイレ<sup>17</sup>などのマーク pictogram, logogram, emoticon と似た性格を持っており、漢字とは抽象のレベルが違う。

これらの象形が、方言表記に利用された例は未見である<sup>18</sup>。

## (2) 指事「宀」

漢字草創期には、象形で表しにくい抽象物について、「上下旦刃」のような漢字を多く作った（阿辻1988）。現代中国には指事としての新字の「宀」mou 5がある<sup>19</sup>（笹原2013）。「宀の反対の無」、宀有 méi・yǒu を意味する。現代の pictogram logogram にも指事の例がある。しかし後述の方言トランプなどの表

<sup>14</sup> しかしLINEの絵文字とパソコンメールの絵文字が微妙に違い、WORDに読み込むとさらに違う。同一図案を使うのではなく、いわば同義語に翻訳する形をとっている。

<sup>15</sup> 現在、様々な通信アプリ（ソフト）の普及により、文字を付け加えるのも出ている。利用者がこれを購入して楽しむことができ、また文字を入力せずに時間を節約することもできる。経済価値を生み出している。例えば、LINEでは、バイリンガルの文字が使用されている。台湾の繁体字と英語、日本語（漢字とカナ）とモンゴル文字、英日文字、満洲文字と日本語の「絵文字」などがある。また、中国の微信WeChatでは、漢字とチベット文字、絵文字とチベット文字が使用されている（限定的ではあるが、友達から受け取ったことがある）。

<sup>16</sup> 交通標識では日本の三角形の「止まれ」が六角形に変えられつつあるなど、国際的な統一の方向に向かっている。

<sup>17</sup> トイレのピクトグラムは、施設によってデザインを変えることがあり、誤解を招き、インターネットでも騒がれ、多様性が記録されている。2024年のパリオリンピックでは競技のピクトグラムを改変し、1964年東京オリンピックの便利さから遠ざかった。漢字の歴史に例えると、則天武后が独自の漢字を作って、前代との接続を危うくした事態に近い。空港などで使うピクトグラムでは、コミュニケーションが重要なので、芸術的な改変は推賞されない。

<sup>18</sup> 台湾のLINEの絵文字では、同時に漢字も付け加えているのがみられる。例えば、「吸你喔」（普通話で「xī nǐ ō」）と発音するが、「あなたを吸い込む」という意味で、絵文字では掃除機を手に入れている。実際の文脈では、いくつか異なる意味もあるだろう。また、「膽固醇（cholesterol コレステロール、簡体字：「胆固醇」dǎngùchún）」という漢字と絵文字があり、これは社会的「現象」が日常的会話に取り上げられたと推測される。また、絵文字が伝えられないという心配からか、それとも意味を強調するためか、さらに漢字を加えて重ねて表現していると言えよう。しかし、これらの漢字を、同じ漢字（簡体字）を使用している大陸の人々が読むことができたとして、「文脈」がなければ、その「意味」（どのような場面で用いるか）が理解しにくいこともあるだろう。

<sup>19</sup> 丘（1997）は会意と位置づけるが、2要素の組合せではない。「宀」という単体字の「7転形」とも位置づける。

記には使われていない。

「辻」は国字であり、複体文字なので会意になるが、「十」を採用した点は、指事の要素もある。

### (3) 会意 国字としての利用と創作

文字数を増やすには、2種の単体文字では足りない。単体文字を組み合わせた複体文字が利用された。生産性を持っているものは、会意と形声である。新たな漢字の「形」を作るのに「義」を利用するのが会意、「音」を利用するのが形声である<sup>20</sup>。

中国本土では、秦の始皇帝による文字の統一で、それまでの漢字の地方差(国による違い)がなくなったが、それ以降に地域差が生じ、唐・宋時代には南方の方言などで会意による新文字(俗字、地域文字、方言文字)が使われた(笹原2013)。中国南部の新工業都市深セン(圳)は、日本のパソコンソフトに実装されてないことがあり、文字化けが起こりうるので、ネットの記事で「土偏に川」などと書くことがある。国字のうちの地名を記す方言文字と同じ類型である。

朝鮮半島でも同様であり<sup>21</sup>、ベトナムの字喃(チュノム)でも会意が用いられた(笹原2007、2013)。

また、古代の中国では、10世紀の遼時代の契丹大字(図3-1中間)も、12世紀の金時代の「女真字」(図3-1左側)も、ともに表意文字であり(その後の「小字」はそれぞれ表音文字)、漢字の「形」を改造し、意味は同じで、発音はそれぞれの言語に沿っている。例えば、契丹大字の「月、日」の形は漢字と全く同じであるが、女真字の場合、右側に「点」が付けられている

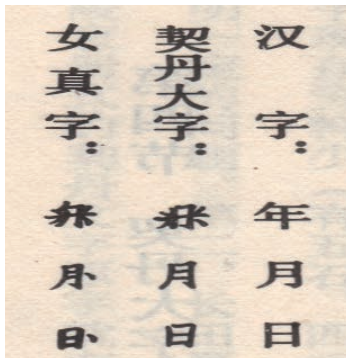


図3-1 (右⇒左) 漢/契丹/女真文字

一方日本では、(奈良時代以前から)新たな字形による「国字」を作ることがあり、この場合は会意が多く利用された。「峠岫畑鯛働」のように会意の原理が使われ、多くの場合訓読みの日本語はあっても、中国語風の音読み

<sup>20</sup> 日本の大漢和辞典の収録漢字は約5万字で、その大部分は形声だが、国字だけを拾うと会意が多い。

<sup>21</sup> 韓国では「水の下に田」のような会意があるが、「代の下に土」のような形声が多い(笹原2014)。

は存在しない<sup>22</sup>。近世には地方的な「方言文字」が、地名表記などのために作られたが、これは訓読みが地方にも普及したからである。国字のいくつかは、自然地名・人名のために作られ、近代の登記の手段になり、JIS規格に取り込まれ、ワープロでも使用可能になった。しかし実際にはその土地でしか使われず、「方言漢字」(方言文字、地域文字、集団文字、位相文字)になった。「木偏に入」でイリ、「さんずいに土」でヌタ、「土偏に上下」で(or峠の山偏を土偏に変えて)タワ・トウ、「門がまえに水」のユリ、「車偏、舟偏、木偏に雪」でソリなど、会意文字が多い。

#### (4) 形声の原理と口偏

形声は、漢字の増殖に貢献し、ことに方言や外国語の発音表記に重要な働きをなした。中国語の場合は、すでに話しことばに存在している単語(音と義が連合したもの)について、新たに文字を与えたとしたら、意符と音符(偏と旁など)を組み合わせる**形声**を用いるのが便利である。現用の漢字の8割は形声によるという。例えば、「進」にあたる簡体字は「しんにゅうに井」だが、「進」(進 jìn)と「井」(井 jǐng)の音が類似することにより、形声を利用している。

中国南方の方言(言語)、例えば広東語では、口偏の文字が形声の原理によって多く作られた。ベトナムの字喃(チュノム)でも使われた。内蒙古フフホトの方言語彙の表記にも使われている(包・井上2024)。

口偏の漢字について、『大漢語林』(鎌田・米山1992)で調べてみた。

**表1**に『大漢語林』口偏の漢字の六書分類を示した。形声が85%を占め、漢和辞典全体の約8割より多い。ことに画数の多い字には形声が多い。象形・指事の単体字が合わせても4%にすぎないことは、複体字の生産性の高さを示す。

「口部」の冒頭にも「口の働きの関係する文字」と「外来語の翻訳字」に言及がある。「口部」の漢字が六書の応用段階、用字法としての仮借に活用されるメカニズムは、漢和辞典でも示されているわけである。

詳しく見ると、「音」があって「義」がないに等しい字や、熟語・用例のな

**表1 『大漢語林』口偏の漢字の六書**

六書	計	%
象形	10	2.6
指事	5	1.3
会意	42	10.8
形声	331	85.3
計	388	100

<sup>22</sup> 東京外国語大学の中国人教師は、「辻」さんを「十」と呼んだそうである。形声と解釈したわけではない。



い字が多い。説明を見ると、以下のように分類される（「」に入れて主な実例を付す；手元のパソコンで漢字が出にくい字は「偏とつくり」で説明する）。

助字「嗎」。文末の助辞、江南地方の方言「口偏に宛」。感嘆詞「口偏に我」。語気詞「口偏に里」「口偏に利」。擬声語「口偏に句」「口偏に合」「口偏に阿」。梵語音訳「喇」「嘛」「口偏に他」。西欧語音訳「噸」「口偏に加」「口偏に非」「口偏に卑」。

しかし本稿で扱ったトランプの次の例は載っていない：「口偏に苗」(図3-6)、「口偏に荷」(図3-2)。また後掲のチベット語店名の字(図3-12)「口偏に丫(ア)」「口偏に谷」「口偏に都」もない。トランプ・看板の字は整っているので、中国の漢字としては情報機器に実装されているのだろう。新しく成立したが、日本には(不必要なので)伝わらなかった形声の漢字と思われる。

中国語の方言や中国周辺の言語の単語に、形声で作られた漢字が(仮借として)適用されるのは、当然である。ひるがえって日本では、前述のように会意によって国字を作ることが多かったので(笹原2007)、口偏の漢字の増大は、見られなかった。

日本の国字の中で、例外的に形声の原理で読まれるものもある。宇田川玄随(1755-1797)らによってオランダ語医書の訳に際して作られた新漢字「腺」sen「臍」suiが例であり、訓読みがない。医学界から一般に普及し、中国などにも広がった(笹原2007)。方言文字としては「のぎ偏に最」と書いたサイ(岡山の地名)、「うかんむりに配」のハイなどがある。

#### (4') 形声による中国語方言表記

丘(1997)は、中国の方言では「有音無字」が起こり、「奇字」(勝手に造字したもの)が見つかる指摘する。その多くは形声原理で、同音字か近い発音の漢字を使うという。丘(1997)は、「米粉の菓子」を指す客家ハッカの「米偏に反」という方言漢字と、潮州方言の「米偏に菓」という方言漢字を、形声の例としてあげる<sup>23</sup>。

表語文字としての漢字を使うと、方言表記に苦労があるが、特性を生かす手段もある。中国語方言トランプデータから、形声としてかつて作られた(口偏などの)漢字を利用した表記を図3-2にあげる。日高(2022)にも類似データが使用されている。成都方言の感嘆詞で、ピンインも示されている。形声文

<sup>23</sup> 米偏で食品であることを表す。前述の口偏と使い方が異なる。

字の例で<sup>24</sup>、方言を知らない人は漢字の旁を見て発音を知るが、場合によって、正確な意味は伝わらないので、小字で意味と例文が添えてある。

図3-2の「哦 啍 ò hó」は、「普通話」にもこのような文字があり、ただし、ピンインで示されている方言音「啍 hó」ではなく、「啍 hē」と発音される。「哦 啍 ò hó」の意味と音が「普通話」と少し違っている。

以上のように、中国語の方言を表記する漢字には、形声の原理が用いられる。これまでの4種類は、漢字の成立に関わる分類だった。以下の2種類は文脈における用法で、そのうち(6) 仮借が、方言や外国語の表記に活躍する。



図3-2 成都方言トランプ<sup>25</sup>

## 哦 啍 ò hó

【词义】语气词，表惋惜之意

【例句】哦啍！碗打烂了。

日本語訳：

【語の意味】語気助詞、残念の意味を表す。

【例文】おおおお！ ボウルが壊れてしまった！

## (5) 転注 国字と中国語方言

(5)・(6) は応用段階の用字法である。「形音義」と関連づけると、転形、転音、転義があるが、六書では音・義の転じたものしか扱っていない。転形は(7)として後述する。

(5) 転注は、形音義のうちの「義」によって意味のつながりを活用する用字法と、位置づけることができる<sup>26</sup>。「音楽」の意の「楽(ガク)」の字を「楽(ラ

<sup>24</sup> 「哦 啍」は文字の成立原理としては、口偏を使った形声だが、用法としては、(6) 仮借のグループに入れることもできる。

<sup>25</sup> 本稿に用いる成都（/洛陽）方言トランプは包伶俐氏の提供による。

<sup>26</sup> 転注の解釈には諸説があったが、河野六郎の説は、「音」「義」と結びつけて、論理的にも整然としている。仮借を「音的転用」 phonetic transfer、転注を「意味的転用」 semantic transfer とする（河

ク)」という発音の「たのしい」の意に（意味の連想を利用して）転用する例があげられる（河野・西田1995）。「鮎」「鮎」をはじめ多くの漢字が日中で別の物を指すようになったが、これを転注の例と見することもできる（笹原2007）。国字の中の「方言漢字」、「峪」「坩」に、サコ、イリ以外の様々な方言的読みが与えられ、実物にもずれがある現象も、転注と考えられる（笹原2007）。

いわゆる「両読字」が転注にあたる。中国語の方言でも、同様に同じ語源・字源の語が別の意味に変化する例があり、転注の例に入れることができる。「蚕豆broad bean」と「豌豆pea」の間で、指す実物が地域によってずれた例は（岩田2009）、（もし中央語の歴史的変化として起こっていたら、または漢字1字で表される語なら）転注の例と言える。

方言トランプでも例が見られる（図3-4、図3-5）。中国語の標準語の漢字と発音が同じであるが、意味が変わっている。



図3-4 成都方言トランプ

### 図3-4右側：瓜娃子 guā wá zǐ

傻子、白痴、脑子有毛病，最经典的成都骂人话，但当长辈骂晚辈瓜娃子的时候，就不再是骂人的意思了，含有亲切，怜爱的意思。

那个瓜娃子骑个烂洋马儿（自行车），洋盘（得意）得很，除了铃铛不响，其它都在响。

野・西田1995）。しかし同字異語homographはコミュニケーションに障害になるので、のちに淘汰された。

## 日本語訳：

「瓜娃子 (guā wázi)」は、成都の方言で、「バカ」「白痴」「頭がおかしい」などの意味がある。これは一般的に成都で使われる罵り言葉であるが、ただし、年上が年下を「瓜娃子」と言うと、侮辱の意味ではなく、親しみや愛情を含む意味に変わる。

例文：その「瓜娃子」は、ボロ自転車に乗って（自慢げに）、ベルが鳴らない以外、すべては鳴っている。

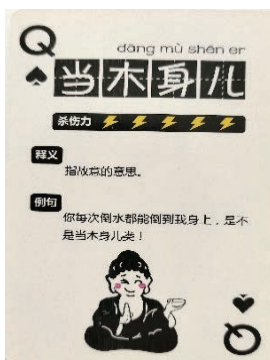


図3-5 洛陽方言トランプ (左側図は日高2023より)

左：屌 ē

厉害！

Brilliant !

右：当木身儿

dāng mù shēn er

【释义】指故意的意思。

【例句】你每次倒水都能倒到我身上，是不是当木身儿类！

## 日本語訳：

左側：「屌ē」：すごい！

右側：「当木身儿 dāng mù shēn er」

【意味】：意図的という意味を指す。

【例文】：あなたが水を注ぐたびに、私に水が降り注ぎます。意図的ですか？

図3-5は洛陽方言トランプで、漢字「屌ē」と「当木身儿 dāng mù shēn er」が標準語の「普通話」と同じで、発音も同様である。ただし、意味が異なっている。方言を知らない人は「屌ē」と「当木身儿 dāng mù shēn er」の文字を読むが、意味が分からない。ピンインが添えてあるため、よその人にも発音分かるし、また左側図と右側図の普通話の漢字「厉害 lihai」(すごい)と「故意的」(意図的)の意味であることと、左側図に英語Brilliant!が添えてあるため、外国人にも意味が分かりやすい。

こうした転注の事例が多くの方言で見られる。

## (6) 仮借：外国語と方言の表記

(6) 仮借かしゃは、形音義のうちの「音」を利用するもので、外国語音を示すのに、古代から用いられ、後世も盛んに使われた。方言表記にも多用される。

歴史的に古い段階からたどると、仮借は、意味と無関係に使われるはずだが、化外の民に悪い意味の漢字を当てることもあった。「匈奴」「蒙古」「倭」などが例とされる。自国語の地名に好字佳(嘉)名二字を与えるという政策と対をなす<sup>27</sup>。また、過去の朝鮮半島や、ベトナム、北方遊牧民族諸言語の表記も、仮借の位置に置く。

日本語の固有名詞は、中国の史書などで「邪馬台国、卑弥呼」のように、六書のうちの仮借を用いて記された。日本では(通説では4~5世紀頃に)漢字を受容して以来、日本語を漢字表記するために、仮借を用いた。万葉仮名として固定し、のちにカタカナ・ひらがなという表音文字に発展した。古事記・万葉集などの日本語も、基本的には仮借で記されたが、中国語(漢文)に翻訳された部分や戲訓など、様々な表記法が混在する。仮借の部分は中国語式に発音すれば日本語になる。中国語に(漢文風に)翻訳された部分は、漢字の訓読みとして固定化された読み方(読み下し)を応用すれば日本語になる。戲訓などは、知恵を働かせて日本語に結びつけることになる。

万葉集東歌あずまうた・防人歌さきもりうたでは、東国方言の発音や文法活用形の違いを示すのにも仮借が使われたし、近世には琉球語の記録に漢字が仮借として使われて、当時の発音を知る手がかりにもなっている。漢字は表意文字とされるが、仮借においては表音文字の機能を果たしている。

アメリカを漢字で「美国」(美利堅共和国の省略)と書き、「美しい国」という意味を連想させる。「巴黎(里)パリ・柏(伯)林ベルリン・倫敦ロンドン・紐約ニューヨーク」「可口可樂コココーラ」などの固有名詞も仮借である。

現代中国の普通話との違いの大きい南方諸方言や、中国国内の55個と言われる少数民族の言語を漢字で表記するときも、基本的には同様に、仮借として位置づけて考察できる。広東語の感嘆詞(or語気助詞)ハイ(そうです)に「哇」(wa/waa)文字をあてるのはその例である。

なお近世近代に中国から日本に入った仮借による漢字表記には、中国南方広東語の発音を参照すると欧米の原語に結びつくものがある。檸檬(ning4(ling4)mung1レモン、普通話では、檸檬(níngméng)と発音される)がその例である。

<sup>27</sup> 日本でも713年に実施された。朝鮮半島にも同じ言語政策があった。

以下では、中国の方言の表記に、(6) 仮借として漢字が使われている実例をいくつか掲げ、ピンインのような表音文字が便利のために併用される傾向を指摘し、最近のアルファベット進出を位置づける。

中国でも、かつては仮借を用いて、漢字だけを使った（古いタイプの）方言みやげがあったが、意味（のずれ）を活用すれば、娯楽としても楽しめる、つまり方言みやげが売れる（日高2024）。

仮借は方言表記にも応用でき、実例が多い。例えば、方言表記の応用では、以下の図3-6は漢字「喵」の「音」miáoを利用し<sup>28</sup>、「ない」（没有méiyǒu）の意味を示している。



図3-6 洛陽方言トランプ

## 喵 miáo

### 【释义】

表示没有的意思。

### 【例句】

A: 你喝汤了喵?

B: 喵, 航黑儿喝。

### 日本語訳:

【意味】「ない」という意味を示す。

【例文】A: スープを飲みましたか。

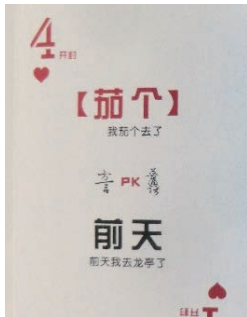
B: いいえ、夜飲みます。

図3-6の洛陽方言トランプにある漢字「喵」は、上にピンインで「miáo」と書いてあり、「普通話」の漢字「喵 miáo」と、声調のみが異なる。「普通話」の「喵 miáo」は擬声語であり、猫の鳴き声を示す。ここでは、形音義のうちの「音」を利用して「ない」という意味を示していて、仮借と解される。イラストが示すように、意味的には、「猫が鳴いて餌を求める」を連想させる。

日高（2022）提供の方言トランプデータから、仮借として類音の他の漢字を用いた表記を追加する。図3-7の開封方言トランプでは、【 】内に似た発音

<sup>28</sup> 「喵」の漢字自体は形声によって作られたが、発音を示す仮借として使われている。

の漢字「茄子」で方言が示され、「前天＝一昨日、おととい」という意味が示され、例文も添えられている。仮借の典型で、ピンインは使われていない。



## 【茄子】

我茄子去了。

方言 PK 普通话

**前天** 前天我去龙亭了。

日本語訳：茄子＝前天

(一昨日)

私は一昨日行った。

(我茄子去了)

一昨日、私は龍亭に行った。

(前天我去龙亭了)

図3-7 开封方言トランプ

また、図3-8の濟南方言景觀も同様であり、下方に「普通話」の「厉害lihài」(すごい、恐ろしい)の説明があるため、理解できる。



尔力：厉害

## 尔力

漢字の「尔力」は普通話の「厉害lihài」(すごい、恐ろしい)の意味があることが示されている。方言はがきも同様であり、ピンインがない(包、井上2024)。

図3-8 濟南方言景觀公園<sup>29</sup>

中国の濟南方言景觀公園では、漢字のみを書いているが、その下に標準語(普通話)で意味を解説している。

現代中国では、ピンイン(拼音 pīnyīn)が普及し、方言発音を記すにも活用

<sup>29</sup> 山东商报(2020年09月23日): 濟南首个方言主题公园来了!\_凤凰网(ifeng.com) 最終アクセス: 2024年1月15日

される。中国のピンインの活用は、ふりがなと似た性格を持つ。現代の方言記述では、意味を通用の漢字で示し、発音をピンインで示す方法がある。

図3-9の成都方言トランプでは、「利边 ní biān」（普通話発音 lì biān）はピンインが示されていて、それなしでは普通は方言の発音が分からない。漢字だけでは方言の意味も分からない。仮借の不便さを示す。



図3-9 成都方言トランプ

図3-10成都方言トランプでは、普通話では、「边花 biān huā」と発音するが、ピンインを見ると、biān fēで、「花」という文字の発音が違うし、意味も異なる。

図3-11の『上海話会話帖』の示し方は、4行並列の形をとり、1行目は普通話による文意、2行目は直訳、3行目はピンイン（声調無）による発音、4行目は発音を示すための漢字をあてた例で、**仮借**ととらえることができる。長い文章を仮借で示すまれな例だが、ピンインを活用している点は、着目に値する（豊富な声調は示されない）。

## 利边 ní biān

【词意】有意，故意

【例句】大热天的，他还利边裹床被子，装神吗？

日本語訳：

「有意，故意」は、「わざと、故意に」という意味である。

例文の意味：真夏の日に、彼はなおもわざとらしいことをやっている。布団にくるまり、神様を装っているつもりか？」





图3-10 成都方言トランプ

## 边花 biān fē

【词意】一只眼有眼疾的人，也指独眼龙。

【例句】你真是个边花，看不清楚事情的真相。

### 日本語訳：

「片目が障害を持っている人や、または単眼のことを指す」。

「君は本当に片目で、事実の真相が見えていないね。」(この表現は、一目で全体を見抜けない、事情がはっきり理解できないといったニュアンスを含む)。

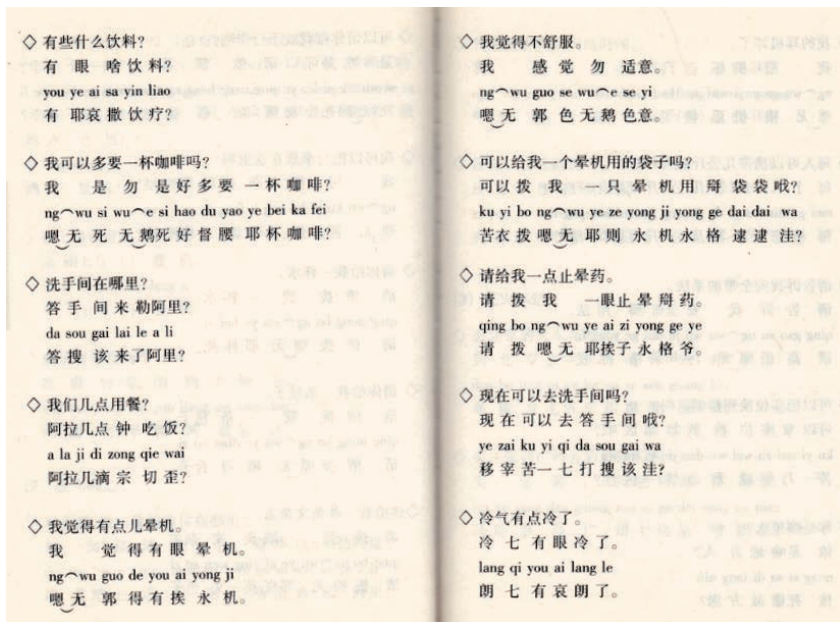


图3-11 上海話会话帖内容(湯立権・張小娟2011)

形声のうち、口偏の漢字のチベット語への適用例が、北京の言語景観として観察された（2023年8月）。図3-12に示すように、「口偏に丫」「口偏に谷」「口偏に都」と書いた店名である。YAGUDU BAKERYと英語が併記しており、臨時的な（その店独自の形声の原理による）用法と考えられる。チベット文字は使ってなかったが、店内の装飾からチベット菓子のお店と推測した。チベット人（ラマ）から得た情報によれば<sup>30</sup>、「丫哈啞 YAGUDU」は「とても良い；悪くない」と言う意味のチベット語である。百度 baidu で yagudu を検索すると、その店の情報とともに、「Yagudu Tibetan culture 丫哈啞藏地文化－展示藏族文化文化的平台」というページが出る。口偏を使っているが<sup>31</sup>、3字のうち2字は違う。「丫」「啞」は悪いイメージを伴う漢字なので、北京の店名では別の中立的な意味の字を選んだのだろう。形声原理を使っているが、固定した表記があるわけではなさそうだ。



図3-12 チベット語 YAGUDU

### (6') ピンインの進出

これら中国語方言や外国語への仮借としての漢字用法とは対照的に、(近隣)少数民族言語へのピンインの適用もある。黒龍江省の『三家子満語伝承活動（第一期）培訓教材』では、声調付き（主に3声）のピンインで満洲語の発音を記録し、また中国語とピンインを合わせて漢字音も示していた（包2019）。

街頭言語景観で、またはカードなどで、読みが知られていない漢字にピンインを添えることもある。北京の簋街には、GUI JIE、gui jie というネオンサインや、道路標識が見られる。表音文字・アルファベットが、表意文字・漢字の領域をせばめつつある。その背景には中国の英語教育の導入があり、グローバル経済への適応がある。日本と同じ状況が、言語景観に反映されている。

以上、中国語と日本語における方言の表記法を論じた。表意文字を用いる中国では、仮借を多く使う。日本の自然地名や動植物名の方言を、会意による国

<sup>30</sup> 高海洋教授の知り合いにあたる。

<sup>31</sup> 漢民族には文化伝統があり、レストランに名前を付ける際、できるだけ「口偏」を多めに使用するという。そうすれば、食べる人がたくさんくるという。こちらは食品関係であるため、「口偏」をたくさん使ったのだろう（例えば、有名な「口福居」にすべて、「口偏」がある）という。

字創出で表記したのと、対照的である。日本では、表音文字のかなを使うようになり、手法に違いが生じた。しかし日本では西欧化・国際化・グローバル化により、アルファベット・英語が用いられるようになり（井上2024.3）、事情が変わりつつある。

現代日本語では、頭字語（とうじご、頭文字語、略字語、アクロニム、acronym）は、「UNESCO」（ユネスコ）、「APEC」（エイペック）のように、単語として読むものと、「WHO」（ダブリューエイチオー）のようにつづりとして読むものがあり、後者は日本語文脈でもアルファベットで書かれる。アーティストの芸名や曲名で、アルファベットのみで書かれるものがある。学術書などで人名や術語をアルファベットのみで書くことがあって、発音が分からないことがある。このように、アルファベットは、着実に進出しつつある。

中国でも英語の浸透が急なので、英語を使った（または英語風の）中国語方言表記が広がる可能性がある。このレベルになると、方言と漢字の問題でなく、方言と文字論という、より広い理論的枠組みの中で論じることになり、6節の世界全体に視野が広がる。

## 4 「転形」の別立て

### (7)「転形」の典型 略字

本稿では、漢字の「形音義」のうち、「音」を変える用字法を転注、「義」を変える用字法を仮借と位置付けた（河野・西田1995）。六書には入っていないが、「形音義」と組織的に結びつけると、転注・仮借に並んで「形」を変える現象が設定される。漢字の字形だけが変わる現象で、(7)「転形」と呼ぶことにする。

略字が「転形」の典型である。字を書く際に、字形が変わることがあり、そのうちの略字は、筆記の経済・省エネが作用して生まれた（笹原2007）。画数減少は、言語経済から言って普遍的な現象である。万葉仮名の略字は、日本のひらがな、カタカナに発展したし、近代の中国簡体字、日本の当用漢字にも採用された。

かつては、皇帝などの関わる文字をタブーとして避けるために、欠字（闕字）が行われ、字形の一部を省くことがあった。これも「転形」であり、「集団文字（漢字）」である。

個別的な「転形」は方言とも関わる。日本では地名などに多く、地域差のあるものは、方言文字（方言漢字）の一類型である。新潟の「瀉」の略字（さんずいに写など）、鶴岡の「鶴」（鶴の右の「鳥」を取り去った字<sup>32</sup>）、多「摩」、三

「鷹」の魔だけだけの表記などで見られた(笹原2013)。「方言」に地域方言と社会方言を含ませる考えからいうと、「集団文字(漢字)」は方言文字の下位分類になる<sup>33</sup>。

「形」の転じたもう一つとして、**合字**、**合成字**がある。国字の「彙」や「鷹」である。仮借(万葉仮名)として「久米・麻呂」の用字が固定したあと、1字化した字である。ただしこれらの文字は漢字の本来の構造に合わない。漢字は「(発)音」としては基本的にCVC(子音+母音+子音)の1音節の構造を持ち<sup>34</sup>、「義」としては1単語を表すが、合字「彙・鷹」は日本語の文脈でCVCVの2音節を表すことになった。訓読みとしてのみ成立する。

狭い社会集団で使われるものは「集団文字」とされる。慶応義塾大学で使われる「魔だれにK」「魔だれにO」などは、形声の原理を使う。集団文字としての「国がまえに書orト」と書く国字は、意味としては「図書館」を表すが、訓読み・音読みとして確立しているとは言えず、CVCなどの音節構造の中に位置づけるのは、難しい。

図4-1、図4-2の西安の漢字の「ビャン」Biangも、合成字と位置づけられる。中国語で一番難しい、複雑とされる漢字で、普通話では使わないため、他地域の人は使ったこともないし、読み方も知らない<sup>35</sup>。



図4-1 西安のビャンビャン麵レストラン (2017年9月5日包撮影)

<sup>32</sup> 1960年代に、大分県のパスの停留所名で「鶴」の略字として使われていた。「都留」「津留」とも書かれた。自然地名由来で、オノマトベのツルリとも関わる。

<sup>33</sup> 同様の現象は、中国でも見られるはずである。

<sup>34</sup> 韓国の世宗が作らせたハングルも、字形上CVCの基本構造を持つ。東アジアの中国周辺で過去に多種の文字が創作されたが、それらもCVCの構造を持つ(笹原2017)。

<sup>35</sup> 国際会議で西安に行ったおりに言語景観の資料を撮っていたところ、母子が通りがかり、子の問いに対して母が発音して教えていた。



## ビャン biang

漢字一つだけで図4-2のような解釈がある。

一点飞上天  
 黄河两头弯  
 八字大张口  
 言字往进走  
 左一扭 右一扭  
 东一长 西一长  
 中间夹个马大王  
 月字边 心字底  
 挂个勾搭挂麻糖<sup>36</sup>  
 坐个车车逛咸阳

図4-2 西安のビャンビャン麵  
 (兵馬備付近レストラン2017年9月5日包撮影)

### 日本語訳：

「点」(丶) を一つ書くと、天に飛び上がり、黄河は両端で曲がる (冫)。「八」文字が口を大きく開け、「言」字が中に進んでいく。左に一回転(玄)、右に一回転(玄)。東に一つの「長」、西に一つの「長」。中央には大きな「馬」の王が挟まっている。「月」字のへん、底に「心」という文字。「か(く)ぎ」(リ)をかけて麻糖を吊るす。車に乗って咸陽を散策する。

## 5 漢字の格付け

### 漢字の「形」の格付け

漢字には様々な位置づけ・格付けがある。「形音義」の「形」からいうと、単純～複雑の違いがあり、(絵画や、偏や旁の)画数で序列が付けられる。難易度の基準の一つである。また左右対称か否かの違いもあり、のれんなどで使うと

<sup>36</sup> 「麻糖 má táng」はごまを飴で固めて細い棒状や板状などの形にしたもの(あめ菓子の一種)である。

きに、裏からも読みやすいかの差がある（井上2007.4）。

### 漢字の「音」の格付け

「音」の観点からは、読みやすいか（記憶しやすいか）どうかの格付けがある。象形と指事の単体文字では、暗記するしかない。会意と形声の複体文字では、旁などの音符を頼りに発音ができればやさしい文字になる。しかし歴史的变化を経て、個別的に異なった発音になったものも多い。類推で読むと間違いと見なされる。日本がかつては「百姓読み」などと言われたが、「洗滌」「口腔」のように、誤用が慣用になり正用になることもある。

景観に出る文字で読み方が分かりにくいときに、日本ならふりがなを付ける。最近では振りローマ字も使われる。特に人名に際立ち、初期の書籍のデザインとしての著者名表示から、最近ではテレビの登場人物（キャスト）の読みなどにも使われる。看板の店名表示にも使われるようになった<sup>37</sup>。

日本では一つの漢字に呉音・漢音・唐宋音などの音読みがあり、さらに多様な訓読みがある。ことに貴族の名前の漢字の読み方は分かりにくかったが、「有職ゆうそく読み」と言う典拠・伝統があった。典拠なしに漢字と読みを結びつける動きが21世紀に目立ち、キラキラネーム、DQN（ドキュン）ネーム、豚切り（ぶったぎり）などと評される名付けが行われた。漢字の音読み・訓読みでない発音が使われ、複数の漢字が1音を表し、従来の漢字の伝統にない独創的な読み方が登場した<sup>38</sup>。文字はコミュニケーション手段なのに、読めない名前が増えた。固有名詞の文字（漢字）には行政の強い制限があるのに、読み方は登記されず、法的規制がないためもあった。2022年から法制審議会で議論され、ある程度の規制を設ける動きがある。これは「音」についての問題だが、キラキラネームは個々の漢字でなく、連続した漢字の読み方なので、問題は複雑である。

### 漢字の「義」の格付け

「義」でいうと、意味分野と関わり、同じ意味分野の漢字は同じ偏（意符）が使われ、木偏、魚偏の漢字などがリストとして示される。用法からいうと、使用頻度数と関わり、初期に低学年の教育漢字として教えられるものは、単純な

<sup>37</sup> 戦前には読み方を示すためにもカタカナの店名が多く見られた。

<sup>38</sup> 普通の文章に使われる漢字については、(国で定めた正書法などを基準に) 厳格な正誤判断が下されるのに、法制として登録・登記される人名の読み方には、制限がないに等しかった。

象形文字で、使用頻度数が大きく、基礎語彙を表す。

### 漢字用法の撲滅・記述・娯楽

近代日本の方言の社会的位置づけについて、撲滅・記述・娯楽の3類型を提示したことがあった(井上2007.2)。中国についても3類型が認められるが、(国土が広いためもあり)時代を異にして交代・変化するのではなく、同時平行的と考えられる(包・井上2024)。根底にある否定的・中立的・肯定的態度は、漢字の用法にもあてはまる。外国語や方言を仮借として記すときに、音の類似を利用するのみでなく、表意文字であることを利用して、意味の連想を利用できる。古代から自国領土の中華の地名に好字佳名を付け、四夷(東夷、南蛮、西戎、北狄)の夷狄いてきに蔑称を付けたのは、否定的態度だった。近代に多くの外国語・外国地名を付けたときには、中立的態度だった。最近の方言みやげで中国の方言単語について、ユーモラスな、面白おかしい漢字をあてるのは、方言への肯定的態度と結びつく。その方が商品が売れるという経済言語学的要因も働く。言語や文字がかつては自由財free goodsで、(途中で場合によっては宗教と結びつき、)現代は経済財economic goodsの性格をあからさまにしていることと、平行的である。日本方言については、近代150年ほどのプロセスだが、平安時代までさかのぼれば1000年の過程になる。中国の仮借の漢字使用については、もっと長いタイムスパンで、異なった(ことばの)民族への反発・侮蔑意識は、さらに古い時期にまでさかのぼる。

以上六書という古典的な概念を利用して、方言景観を頭に置いて、日中を対比した。複体文字の(3)会意が日本の国字で多用され、(4)形声(特に口偏)が中国方言で使用された。用字法の(5)転注では、新たに作ったつもりの国字が中国の元の字と一致することがある。この衝突現象は、両方認めれば転注になり、中国の方言でも起こりうる。(6)仮借かしゃは、中国の方言表記に重要な働きをなす。外国語の発音表記に多用され、近代日本でも地名などで輸入された。

## 6 アジアと欧米の表音文字による方言景観

以上の中国の仮借による方言発音表記を、他の諸言語・諸方言の中に位置づけよう。

中国の前代の政権は満洲族の打ち立てた清朝で、満洲文字と漢字を石碑、貨幣、宮殿の扁額などで併記することがあったが、政権の後期になると、その力が衰えていくに従い、実用から遠ざかっていた。表音文字の満洲文字を使えば漢字の発音表記は可能だったが、歴史的、社会的や政治的などの様々な要素により、学問の世界では満洲文字の習得・活用が多少勧められたとしても広く普及することがなかったようである。なお、清朝政権は300年近く続いていたため、満洲文字で書かれた「档案」が北京をはじめ、瀋陽、ハルビンなど、東北地域の「档案馆」にも多く所蔵されている。近年、清朝の歴史関連研究のために学ぶ人々や大学で研究所などを設けたのもあり、また小学校などでもかつて教えていた経緯がある（包2015）。

モンゴル語字母(ᠮᠣᠩᠭᠤᠯᠤᠯ)の第4と5番目のᠮ、発音は[o]と[u]で、第6と7番目のᠮ、発音は[o]と[u]で、字形がそれぞれ同様であるため、初心者が区別しにくいことがある。19世紀初頭に書かれた『三合語録』及び『初学指南』では、満洲文字でモンゴル語の読みを記録していた(栗林均・ス欽巴図2009、包2022)。例えば、モンゴル文字のᠮᠠᠨᠵᠤ(manju満洲)は、満洲文字でᠮᠠᠨᠵᠤというふうに変更された「点付き」の満洲文字で表記されているため、第2音節の発音が[u]であることがわかる。

韓国の国語研究院では、方言を研究し、保存・記録の活動をして、方言みやげを作っているが、表音文字ハングルを使っているため、表記の問題が少ない。釜山の方言メッセージなどの方言活用例も報告されている(井上他2013)。他のアジア諸国の文字は基本的にはアルファベットと同系の(エジプト象形文字から発展した)表音文字なので、方言の表示に問題は少ない。

アルファベット表記の**ドイツ語**も、正書法に例外が少ないので、方言発音どおりの表記ができる。ベルリンの絵はがきのIk liebt dirは、個々のつづりはドイツ語標準語でも使われ、格変化形が違うだけなので、Ich liebe dichを知っている外国人にはI love youだと推定できる(井上2000)。ケルンのみやげ店の多種多数の方言みやげでも同様だった(井上2007.4)。方言メッセージなどの方言活用例もある。

表音文字でも、**英語**などのようにつづり規則が複雑で例外が多い場合には、文学作品でeye dialectが使われる<sup>39</sup>。英国北東部ニューカッスルNewcastleのジョーディーGeordie方言では、多くの語がみやげ品として表記されており、書

<sup>39</sup> フォニックスPhonicsの普及は未だ不十分である。



記慣習が成り立っているようである<sup>40</sup>。ドイツ、フランス、イタリアなど欧米の言語の「方言で」（観光宣伝や交通安全などの）メッセージが記された例は、少ないが、見つかる。恐らく中国でも他のアジア諸国でも見つかるだろう。

方言の表記が正書法の応用で定まっていれば、個人が方言集を編纂できる。ワープロソフトの普及によって、さらに簡単になり、インターネットの普及により、ホームページでの公開も多くなった。中国でもピンインを活用すれば、方言語形を記せる。辞書として必要なのは語義だが、こちらは普通話に基づく漢字表記でも間に合う。

日本語の場合は、発音をカナで、語義をかな・漢字で示せる。さらに語源を（かな・漢字で）示せる。「タイギヤ大変、すごく 大概」(熊本県)、「シツタケ 大変、すごく 死ぬだけ」(秋田) などである。中国語の漢字表記でも可能なはずである。

日本では、方言の表記に漢字が不便であるために、表音文字のかな・カナが使われたが、最近はアルファベット進出が見られる。漢字離れを示すとともに、西欧化・国際化・グローバリゼーションを象徴する。

## 7 将来の課題 言語間方言学

言語景観の研究は、方言にまで広がり、「言語間方言学」の分野に位置づけられる(井上2007.2)。借用語(外来語・外行語)の方言差にも関係する。すなわち「接触言語学」contact linguisticsの分野につながる。宗教と方言の研究が進んだが、キリスト教のみでなく、仏教の宗派による漢語・漢字音使用の地域差もあり、方言への影響も大きいが見過ごされてきた。

漢字と方言の研究は、ほかにも多様な研究テーマと関わる。在来の研究テーマにとらわれずに、新鮮な関心を持って、方言をとらえ直すことが課題である。

---

<sup>40</sup> 2023年NHK「世界街歩き」による。ネットで多数例が見られる(日高2023)。井上が1989年に訪れたときには、Li Wei氏の案内で数個を見つけたただけであった。

参考文献（日本語はヘボン式ローマ字、中国語はピンイン）

- 阿辻哲次（1988）「漢字の分類—六書を中心として—」 in 佐藤喜代治編『漢字講座 1 漢字とは』。東京：明治書院
- 包聯群（2015）「消滅の危機に瀕する満州語の社会言語学的研究—中国黒龍江省を事例として—」 in 包聯群編著『現代中国における言語政策と言語継承』（第2巻）124-173頁。東京：三元社
- 包聯群（2019）「満洲語の保存と継承の動向—三家子村を事例として—」 in 『現代中国における言語政策と言語継承』（第4巻）149-154頁。東京：三元社
- 包聯群（2022）『『三合語録』『初学指南』などの文献における中国語対訳及び言語接触について（浅談《三合語録》《初学指南》等文献対訳汉语及其语言接触）』、内蒙古大学第一回文献学国際シンポジウムにて講演（オンライン2022年7月16日）
- 包聯群（2023）「言語継承における言語（音声）景観の役割—少数言語特に無文字危機言語を事例として—」 in 『現代中国における言語政策と言語継承』（第7巻）79-102頁。東京：三元社
- 包聯群・井上史雄（2023）「言語継承における言語景観と五官—コミュニケーションにおける視覚情報の優位性—」 in 包聯群編著『現代中国における言語政策と言語継承』（第7巻）1-33頁。東京：三元社
- 包聯群・井上史雄（2024）「中国の方言景観と方言みやげ—歴史・地理・経済—」、『大分大学 経済論集』（5, 6合併号）
- 日高知恵実（2022）「方言の商業的利用—常州方言トランプの表記を例として—」『地理言語学研究』モノグラフシリーズ（岩田礼教授栄休記念論文集・下冊）2-2, 395-417頁
- 日高知恵実（2023）「中国語方言グッズの世界」、明治学院大学教養教育センター付属研究所年報：synthesis 2022, 15-18頁
- 日高知恵実（2024）「方言の活用をめぐる「選択」と「意識」—中国上海市南郊外の取り組みを例として—」、明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル = The MGU journal of liberal arts studies : Karuchuru 18, 61-68頁
- 井上史雄（2000）『日本語の値段』。東京：大修館書店
- 井上史雄（2007.2）『変わる方言 動く標準語』。東京：筑摩書房
- 井上史雄（2007.4）『言語楽さんぽ』。東京：明治書院
- 井上史雄（2024.3）「方言みやげの表記—カナ・漢字からアルファベットへ—」

## 静言論叢 6

- 井上史雄 (2024.6) 「方言景观与方言纪念品 — 历史、地理、经济 —」、『中国語言戦略』(第 1 期)。11 (1) 南京大学出版社
- 井上史雄 (予定) 「方言景观と方言みやげの社会史」 in 三宅和子『境界と周縁』。東京：ひつじ書房
- 井上史雄・大橋敦夫・田中宣広・日高貢一郎・山下暁美 (2013) 『魅せる方言地域語の底力』。東京：三省堂
- 岩田礼 (2009) 『漢語方言解釈地図 The Interpretative Maps of Chinese Dialects』。東京：白帝社
- 鎌田正・米山寅太郎 (1992) 『大漢語林』。東京：大修館書店
- 河野六郎・西田龍雄 (1995) 『文字蟲眞』。東京：三省堂
- 栗林均・斯欽巴図 (2009) 「『初学指南』と『三合語録』におけるモンゴル語の特徴 — 満洲文字表記モンゴル語会話学習書の口語的特徴 —」、『日本モンゴル学会紀要』。第 39 号。1-13 頁
- 丘学強・千島英一訳 (1997) 『広東語の風景』。東京：東方書店、【丘学強 (1989) 『妙語方言』 香港：中華書局】
- 笹原宏之 (2007) 『国字の位相と展開』。東京：三省堂
- 笹原宏之 (2013) 『方言漢字』。東京：角川選書
- 笹原宏之 (2014) 『漢字の歴史』。東京：ちくまプリマー選書
- 柴田武 (1958) 『日本の方言』。東京：岩波新書
- 笹原宏之 (2023) 『方言漢字事典』。東京：研究社
- 湯立権・張小娟 (2011) 『臨時急需一句話 上海話』 東南大学出版。

## 謝辞

本稿は、2023年8月26日－29日に開催された国際都市言語学会第20回年次大会における井上の以下の基調講演に基づく。機会を与えてくださった関係者に深く感謝申し上げる。「方言景观と方言みやげ—歴史・地理・経済—」IAULS (the International Association of Urban Language Studies) 2023.8 内蒙古大学。包聯群による中国語訳が井上 (2024.6) である。派生・発展したテーマについて、井上 (2024.3, 2024.6、予定) および包・井上 (2024) に記述した。一部はインターネットで公開される。

本稿提出前に、笹原宏之氏に読んでいただき、修正を加えることができた。

深甚の謝意を捧げる。その後加筆したので、不適切な記述や誤記の類はすべて筆者の責任である。

## 要旨

本稿は、方言景観データを、総合的に扱う試みの一部分をなす。中国の最新の情報も取り入れ、日本と対比した。漢字で表記される中国語とカナで表記される日本語の違い、中国の普通話と日本の共通語・標準語との違いなどを考察した。漢字の字形に関する六書りくしょのうち、日本の国字を作るのに会意が役立てられ、中国の方言の表記と中国語にとっての外国語の表記に仮借が使われた。最近は英訳・アルファベット表記の普及という西欧化・国際化が見られる。日中に共通の現象である。これらを理論的にまとめた。